

流れた唾き

長谷川時雨

青空文庫

神田のクリスチャンの伯母おばさんの家うちの家風が、あんぽんたんをしど甚くよろこばせた。この伯母さんは、女学校を出て、行燈袴あんどんばかまを穿はいて、四円の月給の小学教師になつたので、私の母から姉だ妹いの縁を切るといわれた女ひとだ。でも、当時を風靡ふうびした官員さんの細君になつたので、また縁がつかつたものと見える。思うに私の母はちと癩しやくだつたに違いない。家業は自分の夫の方が小粋こいきで、モダンなんだが、家風がばかに古くつて、伯母の家とはてんでおはなしにならない、違いかただった。

それも八十になるおばあさんがいるからだ——そう思ったことであつたらう。今考えると、月琴げつきんをかかえたり、眉毛まゆげをたてた

りしたのは、時代の風潮ばかりではなく、このお婆さんの、近代モダン生活ライフにグツとしたのかもしれない。

しかし、その時分のモダンは、四布風呂敷よのぶろしきほどの大ききの肩掛

けをかけたなり、十八世紀風のボンネットや肩あてに当ものをしたり、

お乳ちちにもあてものをして、胸のところあてで紐を編上げたりするシミ

ズを着て、腰にはユラユラブカブカする、今なら襠褌おしめ干しにつか

うような格好のものをに入れて洋服を着ていた時代である。江の島

か鎌倉へゆくと、近所知己からお留守見舞うそというものをくれて帰

ってくるうそとあの子は洋行をして来た——嘘うそではない。洋行という

新時代語と、道中とか旅とかいつていたのを、洋行というむずか

しい言語ことばで言いあらわそうとした間違いを平気で、いつてみれば、

あの方がダラ幹さんという方？　ときく人がある、ああした生なまはんかな、物知り——そんな位なところなのだったのだ。もつとあとだって、昨夜ゆうべは大財産をなすつたなんて、財産と散財と、とんちんかんなのを、どうしても得えとく出来なかつたものさえある。

私の家族うちは御飯のとき、向側の角が祖母、火鉢をはさんで父、すこしはなれて母、母の横から小さい姉妹が折おりまが曲まがつて、祖母の前が丁度私の居場所になる。みんな、各めいめい自じのお膳を行儀よくひかえる。祖母は何もかも一番早くゆくから一番さきにしまいになる。すると、長い煙管キセルについて監視人と早がわり、御飯粒ひとつでもこぼすと、その始末をしてしまわないうちは食べさせない。あたしは味噌汁おみおつけが嫌いなので、ぽつちりとお椀わんの底の方へよそ

ってもらつてもつい残す。とにかく祖母の目はあたしにばかりそ
そがれているからたまらない、最後に、こごと小言はいわずに、

「越えつちゆうたてやま中立山、無限地獄に墮おちるぞよ。」

と、あたしのお残りへ白湯さゆをさして飲んでくれる。あんぽんたん
ながら、それには恐縮して、としより老人の眼は悪かろうからと、だん

だん後へさがつて座るのだが、お豆腐ぎらいのために母が内密ないしよ
で半片はんぺんにしてくれると、ちゃんと知っている。だから私はすべ

て襖ふすまのそとへ手をついて——只今という機械人形のようなおとな

しさだ。この祖母は、ぞんざいな者が傍へくると、近よらないさ
きから足を踏まれない用心に、あいたあいたと言つた。と、いか
なぞん気ものでも吃驚びっくりして立止まるか静かにあるくかする。一

挙両得、叱らずに叱られずにすむ妙諦みょうていである。

そんな家から小官員こかんいんさんの新家庭へゆくと、伯母さんは多い毛をお釜かましき敷のような束髪にねじつて、襟なしの着物で、おかみさんでもひっかけ（帯の結びよう）でなしに、ちりめんの前掛けも締めないで、机のような大きなお膳へ白い布をかけて、夕飯の時には若い牧師さんも来て座つて、いろんなお皿が出てもすぐ食べないで、鉄ぶちの眼鏡をかけたその若い牧師さんが、小さな本を開いて、なんだかブツブツ言うと、みんな頭を垂れていて、終しまいにアーメンと呟つぶやいて額と胸とに三度十字をきる。でも、大人でも、よつぽど待どおしいと見えて十字は実に早くやる、お茶碗もすぐ口にもつてゆく。食物たべものは家のよりまずいが牛乳の缶かんは毎

朝台所にぶらさがっている。伯母さんは鶏卵たまごの黄身きみをまん中にして白身を四角や三角に焼くのが上手だ、駿河台へニコライ堂が建つとき連れてつてくれたのもこの伯母さんだ。ヴィオリンの音ねや、ピアノや、オルガンの音をはじめて耳にしたのも伯母さんの住居へとまりにいったからだだった。そのころ下町でそんな音色ねいろも、楽器も知っているものはなかった。あんぽんたんは外国にの匂においを、ここではじめて嗅かいだのだ。なぜなら神田は学問をする書生さんの巣窟そうくつであり、いまでいうインテリゲンチヤの群である。帽子をかむった人なんか、めったに見ない下町ツ子は、通る人がみんな白金しろかなきん巾へこおびの兵児帯へこおびをしめているのに溜息ためいきした。夕方は下宿屋の二階三階に、書生さんたちが大勢ですりに腰をかけていた。私

は女がそういうふうをしているのを新宿（妓楼）で見たことを伯母さんにはなした。

南校なんこうの原はらでバツタやオートをつかまえて、牛が淵でおたまじゃくしを掬すくった。従弟いとことおまっちゃんいれと三人で、炎天ぼしになつて掬すくったが、入いれものをもたないで、土に掬すくいあげたのはすぐ消たように乾ひかたまつてしまつた。三人は唾つばきをした。川の水に唾つばきをして唾つばきが散れば肺病ではないと、なにが肺病なのかよく知らないのに、幾度も幾度も唾つばきを吐はいた。すぐに散つてしまふと手を叩たたいて歓声をあげる。

帰ると盥たらいを出して水をあびる。溝どぶに糸みみずのウヨウヨ動いているのを見つけて、家の金魚のおみやげだと搔かきまわ廻まわす。邸町やしきまち

の昼は静かで、座敷を大きな揚羽蝶あげはちようが舞いぬけてゆく。お砂糖水をこしらえようと砂糖壺つぼをあけたら、ここにも大きな蝶がじつとして卵をしている——私たちはウワツと叫んだ、なにもかもが珍しいのだった。

だが、ふと、自分の家の午後も思出さくないではない。みんなして板塀へいがドツと音のするほど水を撒まいて、樹木から金の雫しずくがこぼれ、青苔あおこけが生々した庭石の上に、細かく土のはねた、健康そうな素足を揃えて、手拭で胸の汗を拭ふきながら冷たいお茶受けを待っている。女中さんは堀井戸から冷ひやつこいのを、これも素足で、天びん棒をギチギチならして両桶くに酌くんでくる。大きな桶に入れた麩そうめん麺めんが持ちだされる時もあるし、寒天やトコロテンのことも

あるし、白玉をすくって白砂糖をかけることもある。

——そのころの人は水の味をよく知っていた。どこの井戸はくせがある。この水は甘い、あそこのは質たちが細かい——女中さんは自慢で手桶のふたをとる。今日のは何処どこのですかおあてになつてごらんなさいと——

金魚も水をとりにかえてもらつて 跳おどり上あがつているのであろう。

私の鉢のまるつこの子は、大きくなつたかしら、背中がはげてきたかしら、目高めだかがつつきやしないかしら——

「ねえおまつちゃん、弁慶蟹べんけいね、なにを食べてるだろう。」

おまつちゃんもちよつと不安な顔をする。つくばいの吸込みの小さな穴へもぐってしまった弁慶蟹の子が、年々大きくなって、

片っぽの鋏はさみだけがやつと穴から出せる位に、吸込みの穴の中で成長してしまった。右の手をだして、穴のまわりの青苔をはさんで食べていたが、もう手のとどくところには苔がなくなっていたのだ。根の赤い、ギザギザのある奇麗な、そして不具な片手が穴の中から差出されると、小さい時分にはよく掴つまみ出してやった大人たちは、意固いこじ地に逃込むのを憎がって、この頃は手をだすのを見つめるたんびにざまあみやがれと言って笑った。子供はその大人を憎んだ。誰もがいないと、おまんまつぶを持って行ってやった。好きな沢庵たくあんもやった。沢庵を裂いてやるとよく知っていてはさんだ。此方からは見えなくつても、穴の中からは見えるのかも知れない、小さな眼が覗のぞいていたのでもあろう。

私たちは小さな亀の子をほしがった事がある。壹錢銅貨位のや天保錢位の大きさを買ってもらって悦んだが、飼えに蚯蚓みみずをやるので嫌いになった。私は蛇より蚯蚓が厭だ。蛇は下町にはいないから話以上伝説化した恐怖をもちはずるが、見たことがないから蚯蚓の方が気味がわるかった。その蚯蚓の太いのを、小さな亀が食べる。しかも、背中を突ツついても石つころのように堅くねむつてももいたようなのが、餌を見ると猛然と首を伸してかぶりつき、掌てを拈ひろげておさえる。大きさからいえばあんぽんたんが大蛇にむかったようなのに、蚯蚓の胴中からは濁った血——液しるが出てくる。亀の子はお爺じいさんのような皺しわだらけな頸くびすじをのぼし、口は横まで一ぱいに裂け、冷やかな眼をうごかさずによせている。不思議

議なこと、後年よく見たのだが、その眼が蛇の目とおなじであり、口のかたちも似ている。もしもし亀よ亀さんよの唄を、可愛らしい子供の口からきいても、なんだか亀が陰険でいやだ。

夏の下町の風情は大川から、夕風が上潮と一緒^{あげしお}に押上げてくる。洗髪、素足^{すあし}、盆提灯^{ぼんちようちん}、涼台^{すずみだい}、桜湯——お邸方や大

店^{おだな}の歴々には味えない町つづきの、星空の下での懇親会だ。湯屋^やより、もちつとのびのびした自由の天地だ。まず各自^{めいめい}の家が

——家並^{はいけい}が後景^{はいけい}になって天下の往来が会場だ。その時は、もし、お長屋に警官さんがいても、その人もまたほんとの人間にかえつて、胸毛を出して、尻をまくりあげて、渋団扇^{しぶうちわ}でバタバタやつて来会される。おかみさんの肌抜きも咎^{とが}めなければ、となりのお

父さんの禪てん一つなのも当り前なのだ、真てんに天真爛漫しんらんまん、更けるほど話ははずむ。何処どこでもする怪談ばなし、新聞がいまほど行き渡らないから旧幕時代の、垢あかのつききった「お岩様」で声をひそめている。夜六時すぎしてから「お岩様」のはなしをすると怪異があるというのだ。そら引窓があいた！　なんて、年甲斐がいもなく妙な声を出すのもある。

新内しんないが来る、義太夫ぎだゆうがくる。琴と三味線を合せてくるのがあ
る。みんな下手へたではない、聴きき巧こう者しゃが揃そろっているからだ。向う
新道の縁台でやらせている遠く流れてくる音を、みな神妙しんじつに聴入
っている。生活に幾分余裕があつたのでもあろうが、お三さん日じつに
——朔日ついたち、十五日、廿八日——門かどに立つ物乞おもらいも、大概顔がき

まっていた。ことに門かどづ附けの芸人はもらいをきめているようだった。女太夫の名残りもあつたのだろう。家によつては煙草タバコの火をもらつて話してゆくのもあつた。琴三味線の合奏は老女が多かつた。みなといつてもよいほど旧幕臣のゆかりだった。縁えんにち日のはずれの方に、小さく敷ものをして、紙がとばないように小石をおいて、お家流の美事な筆跡で、すらすら和歌や詩を書いては、一枚書くと丁寧にお辞儀をする品のよい老女がいた。落おちぶれ泊おちぶれても手や顔に垢あかをつけていかなかった。その前にしやがんで、表札を書いてもらつているものや、手紙の上封ふうを頼んでいるものもあつた。私はよく言われた、お前は、書籍ほんばかりすきだと、ああいう人になるよと。

小伝馬町の、現今電車の交叉点こうさてんになっている四辻に、夕方になると桜湯の店が赤い毛布ケットをかけた牀床しょうぎをだした。麦湯、甘酒、香煎こうせん、なんでももある。このごろの芝居ではお盆でですが、一人だと茶台ちやぶだい——真中に穴のあるものでも出した。その廻りには、煎りたて豆だの、赤に紫の葡萄ぶどうの絵を描いた行燈あんどんのぶどうもちだの、飴あめやが並んだ。金米糖こんべとうやもあつた。金花糖かじやも人形町に店があつて、招き猫は大小となく出来ていた。囓かじるとガランドウとムクとあつた。廻り燈籠どうろうや、ほおずきやが夜の色どりで、娘たちが宵暗よいやみにくつきりと浮いて匂におつた。

浴衣ゆかたと行水ぎょうすいが終日いちにちの労れつかを洗濯して、ぶらぶら歩きの目的は活動もなくカフェもない、舞台装置のひながたと、絵でい

た芝居見たままの、切組み燈籠どうろうが人を寄せた。

横山町や、薬研堀やげんぼりあたりの大店では荒い格子戸の、よく拭き

込んだのをたてて、大戸を半分だけおろして、打水をして見せていた。わざと店はあまり明るくはなかつた。そして店はキッチンと取りかたづけられて、誰も——小僧一人いはしなかつた。そういう家の前を離れると、すぐ傍が黒い蔵であつたり、木口のよい板塀であつたりして、天水桶てんすいおけや、金網じょうやとうをかけた常夜燈ともが灯つていたように覚えている。日本橋にはそういう古風なところが多く、いつまでも残されていた。

燈籠の中味は、背景も人物も何もかもが切りぬいた錦にしきえ絵えなのである。三枚つづき五枚つづき、似顔絵のうまい絵師えぞうのが絵草紙

屋しやの店前にさがると、何町のどこでは自来也じらいやが出来たとか、どこ
 では和唐内わとうないの紅流べにながしだとか、気の早い涼すずみだい台だいのはなしの種
 になった。そしてよく覚えていないが、脚フットライト光などの工合もう
 まく出来ていた、遠見へは一々上手に光りがあててあつた。曾我
 の討入りの狩屋かりやのところなどの雨は、後に白滝しらたきという名で売出
 した、銀紙のジリジリした細い根がけ（白滝として売出したのは、
 今の左団次さだんじのお父さんが白滝とかいう織姫になつた狂言の時だつ
 たと思う）を、上から下へ抜いて、画心に雨を面白く現わしたり
 していた。白い菅糸すがいと（これもバラバラした根がけ）でこしらえ
 たのもあつた。

何処どこの家で、今年は素晴らしい切り組みが出来たと噂うわさされるほ

どなので、なかなか手を尽して、横長角な遠見を、深くせまくした、丁度舞台の額縁がくぶちの通りなのが、三面ある家も、四角にして四面あるうちもある。一幕目二幕目と続いたのや、または廻り舞台のつづきや、一番目の呼物と中幕と、二番目のを選んだり、更にまたその家の鼻唄ひいき役者の当り役ばかりを選んで幾場もつくつたりした。前に言ったような、動かして見せるのではなく、三尺からのものを四ツも五ツも飾って見せるのもあった。職人衆のうちは景気よく明あけつぱなしで、店さきへ並べて、奥の人たちも自慢すだれそうに簾すだれのかけで団扇うちわづかいをしながら語りあっているのもあった。その上にも景気をつけて新内しんないをやらせたり、声色こわいろつかいいを呼込んでいるのもあった。

絵双紙屋の店には新版ものがぶらさがる。そぞろあるきの見物はプロマイド屋の店さきにたつ心と、劇好きと、合せて絵画の観賞者でもあるのだ。

子供というものは、ふとした時にきいたことを生涯忘れぬものである。あんぽんたんの幼心にしみついたのは、前にも書いたかもしれないが、太胡たこさんという、何か不平を蔵していたらしい酒のみの壮士が、私がほおずきをふくんでいるのを見て、たった一言激しくたしなめたことがある。それからフツツリほおずきを鳴らさない、器用に何でも鳴るのだが——出たての空豆の皮などを、ついふツと吹きはするが、すぐ苦さがこみあげてくる。も一つは父のいったことばで、ある時、父はしみじみと、幼い私に言うよ

うな事でない言葉を洩もらした。よほど胸につまっていたのであろう。

「四民平等の世の中なのに——俺おれはいけない。なあんだ、当り前だと思いながら、情なさけないことに町人根こんじょう生うがぬけないのだな、心ではそう思いながら、つまらない奴に、自然と頭が下がりやがる。甚ひどいもので、代々植付けられて来た卑屈だ。いめいましいが理屈じゃどうにもならない。お前なんぞは、そこへゆくと、生れた時から自由の子だ、どんな奴にも、頭あさげるな、おんなじ人間だぞ。」

私は父を愛す。晩年に近く失敗したけれど、それは殆ほとんど父の仕業わざではないほど私の知る父とは矛盾した事だった。私の筆はやがて其方へも進んでゆくであろうが、そこでは弁護しないが、父の

壮年時代を知り、晩年を知るものは、なにのためにかを考えさせられる。父は後にいった。長く考えていたことを、ふと迷つて、そしてまた長く悔ゆると――

父のひとがら人格がすこし変つたのは、中年過ぎて男の子が出来てから、母の狂愛に捲込まれてからだった。私につぶやいてきかせたころは、実に好きな父だった。夜、客のない時、お膳ぜんを前にしてチビチビやりながら書籍しょもつを読んでいる。私を前におくのがくせだった。ふと気がついて書物から眼を離すと、おとなしく膳の前に座っている私に、お肴さかなをつまんで口に入れてくれた。（それは四つ五歳いつつのころのことだが――）私は父が傍見わきみをしながら猪口おちよこを口にはこんで、このわたが咽喉のどにつかえたのを見てから、いつも

鍔はさみをもつて座つていた。

父は私を友達のように、とんでもない場所ところへまで連れてゆく。

薬研堀やげんぼりのおめかけさんのところへ連れていったまま、自分は用

達うたしに出てしまうので、私は二、三日して送りかえされる。つい

て来た老婢ろうひが、なにかと告口つげぐちをするのに、私は何も言わないの

で母に大層折檻せつかんされたりした。

またある時は吉原へ連れてゆく。桜の仲之町の道中も、仁和加

も見た。金屏風きんびょうぶを後にして、アカデミックな椅子いすに、洋装の花

魁いらんや、芝居で見るとような太夫たゆうは厚いふきを重ねて、椅子の上に

座り前に立派な広帯を垂らしているのを見た。せまい道巾みちはばのと

ころへいったら、小さな店に、さびしげにいた黒い白粉おしろいをつけ

たようなお女郎が「おちやびんだ」とどなつて、煙管キセルを畳に投げつけたので、私はびっくりして、格子にぶるさがつていた手をはずしてベソをかいた。ある時は芝居につれていった。よわむしな私は芝居がこわくて、大きらいだったのに連れていつては失敗していた。新富座しんとみざに時の大名優九世市川団十郎が「渡辺わたなべ華山かざん」をして、切腹の正念場の時、私は泣出したのだそうだ。父は私をかかえて家まで送つて来て、折角のところを見そくなつたとこぼしていた。そんな事は度々であつた。私はかなり大きくなつてからでも、芝居茶屋の二階に、ポツネンと、あねさまを飾つたり、ボンヤリ考えたりして一人で居残つていたことが多かつた。

それより困るのは撃げっけん劍大会というようなところへ連れてゆか

れる事だ。私の姪めいや甥おいがボート選手の古いのをお父さんにもつて、その季節シーズンに連れてゆかれると、お父さんの熱狂奔走ぶりに悲しくなるといったが、私の父の撃剣の場合もそうだった。小ちつぽけな子供びつくりなんぞ袖の下にはいつてしまつて、父は棧敷さじきにがんばる。吃驚びつくりするような気合をかける。ト、ト、ト、ト、トツ、そら突け！ と呶鳴どなる。私は縮みあがつてしまつて、父は殺されはしないかと思つた。やがて自分も引っぱり出されてゆく。ゴチャゴチャになると、どれが誰だか分らないので、私は帰れるのかしらとベソをがまんしている。

国会開設前の時流は、三多摩の壮士が竹鎗やりで、何百人押寄せてくるのなんと、殺伐な空気であつたと見える。政談演説会や討

論会もよく開かれた。ある折両国の福本という講談席亭で、講談師なのか壮士なのか、あるいは弁士なのか、またはそれらの交りなのかその処は記憶が誠にはつきりしていないが、擬国会みたいなものが催うされたらしい。例によつて私は父に連れられていた。自由党の人たちが多く来ていたのであろう。あれは中島だよとか、あれは誰だよとか種いろんな名をきいたが覚えてはいなかつた。ただ、父と論じあつたので板倉中いたくらちゆうという人の、赤ら顔の、小肥こぶとりの顎髭あごひげのある顔と、ずんずら短い姿と名を覚えていた。この時も、正面の棧敷さしきにいたが、大きな声をするので私は閉口していた。それに、どこでも呶鳴るので溜息ためいきが出た。

父は刀が好きだった。暇ぬくがあると拭ぬぐいをかけたり粉こなを打つたり

して、いつまでもあきずに眺めていた。磨とぎに出したりりするのも好きだった。燈火の下でやる時もあるが、昼間でも静しずかなときには一室を締めきつてとじこもっていた。そんな時、母は大きらいで自分からさきに避けた。

「そらお父さんがはじめた、みんな退どいておいでよ。」

私はなんとなしに、父の仕事に興味をもった。よく傍そばにいた。

父は顎あごであちへいつていると指し示した。私は室のそこから覗のぞいていると、父は居合を——声もかけずに、すらりと座ったままぬくのを試している。二ふり三振り刀を振って、また惚ほればれと見ている。みだれとか、焼刃の匂いとかいうものを教えてもらったのもそのころだ。

私と父との静な問答がはじまる。

「お父さん剣術つかいがいい？」

「うん。」

「絵かきがいい？」

「うん。」

「なにが好い？」

「お父さんはな、八歳か九歳の時分手習師匠が大変可愛がつてくれた。するとな、かみなり雷師匠といわれた手習のおしよさんの近所に国くににとし年という絵かきがいてな、絵を教えてください、これも大変可愛がつた。その時分むこうりようごく東 両 国くにに、万八という料理おちややがあつて、書画の会があるとかめだほうさい亀田鵬斎という書家ひとや有名な絵かきたちが来

てな、俺おれを弟子にしようと思んなが可愛がつてくれた。その頃の

人たちが、紙へかいてくれた絵話えばなしのような絵が沢山あつたのを、

祖おじいさん父ちちが丹念にとつておいてくれたのだが、どうしてしまった

かなあ。どつちかになつておけばよかつたのを、祖おふくろ母ははが、商あきん

人どがいいといつて丁ちやうぎん銀ぎんという大問屋へ小僧にやられた。」

それがな、といつて父は私のおかつぱの頭に手をおいた。

「丁銀のおばあさんも八釜やかましやで、灸きゆうが大好きだから、祖おふくろ母ははの

気が合つてたんでやられたのだ。」

「では小僧さんでもお灸を据えられたの！」

あたしは大きな父が痛ましかつた。私とおなじように、やつぱりお灸を据えられたのかと——そして祖母がよくはなす、

「祖父が丸の内のお出入り屋敷へゆくと、向うから、薬包紙やくたいしのように日にやけた小僧が、白い歯をだしてニヤニヤ笑いながら来るので、よく見たら家の息子だった。」

父は色が黒くて菊石あばたがあつたから、この上黒く干しかためた小僧だったら、どんなに汚なかつたらうと思つた。

——父はよく言つた。菊石という号をつけようと思つたが、溪いせき石の方がよかろうと、なんとか葱ねぎという人がつけたのだと。

だが、父の若い血は算盤そろばんをはじくまで辛棒しかねて、お玉ヶ池の先生千葉氏の門下になつて、先生には可愛がられたが、親や近所から鼻つつまみになつた。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

流れた睡き

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>